アルジェリアの
夏

内田 透

Toru Uchida, 東洋エンジニアリング

昨日のバリ祭の興奮が、まださめやらぬ早朝、オリイ空港をたって約2時間、眼下に地中海を見ると、すぐアルジェリアの赤茶けた土漠が広がっていた。地中海を越えただけで、こんなにも景色が違うものかと感心する間に、機はコンスタンチヌス空港に着陸した。

海岸線より200 kmほど内陸であり、真夏ということもあって、空港の回りは、ほとんど平坦な見渡すばかりの土漠で、わずかにある街路樹も生気がない。

途中のカフェで、生温いながらもコーラで喉を潤した後、目的地であるスキクダへ向かった。

スキクダは、首都アルジェより東へ400 kmほどの地中海に面した美しい町で、赴任当時は、LNG、LPGプラントのみが稼動中であつたが、現在はこれに加え、エチレン、VCM、PVCなどのプラスチックコンプレックスや精油所が稼動、もしくは建設中であり、アルジェリアはもちろん、アフリカ大陸一の工業都市となりつつある。

気候は、緯度が高いため、夏でも日差しが強いだけで異常に暑いということはないが、時々、サハラ砂漠より、シロッコと呼ばれる風が吹いてくることがある。この風が来ると、気温はぐんぐん上昇し、日陰でも45℃程度になる。

砂漠の生活についてのエッセイの中で、乾燥した状態で、気温が体温より高くなると、部屋はもちろん走行中の車でも窓を閉めた方が、涼しく感じられると書かれていたが、全くその通りで、加えて、ハエが水分を求めて、口や目を攻撃してくるのには、まいってしまった。こんなわずかな体験ではあつたが、砂漠の厳しさが、伝わってくるようであつた。

イスラム教には、五つの勤行があるが、そのうちの

一つに、イスラム暦9月、ラマダンに1カ月にわたって行なうサラム（断食）がある。

この期間は、日の出から日没まで、水はもちろん、人によっては唾さえも飲み込まないというほど、完全に断食する。

私の赴任時のラマダンは、一年中最も暑い時期であつたこともあろうが、じりじりと照りつける日中、彼らは日陰を見つけては、昼寝を決めこんでいる。しかし、日没となると、ちょっとしたお祭り騒ぎで、町の商店は一斉に店を開け、人々はこれから日の出までに食べる物を買いに、通りへあふれだし、その生き生きとした姿に目を見張るほどである。

アルジェリアは、世界第4位、6兆立方メートルという膨大な埋蔵量の天然ガスをはじめ、石油、鉱物資源などにより、今後とも工業化を進めてゆくであろうが、この工業化に対して、サハラ砂漠に見られる厳しい環境と、生活全般に関与しているイスラム教との調和は、われわれにとっても重要な課題であると、夏の日差しの照りつけるプラントを眺めつつ感じた。

（技術本部 プロセス二部、専門＝プロセスエンジニア）

写真＝サハラ砂漠 チムガットの遺跡、ローマ時代